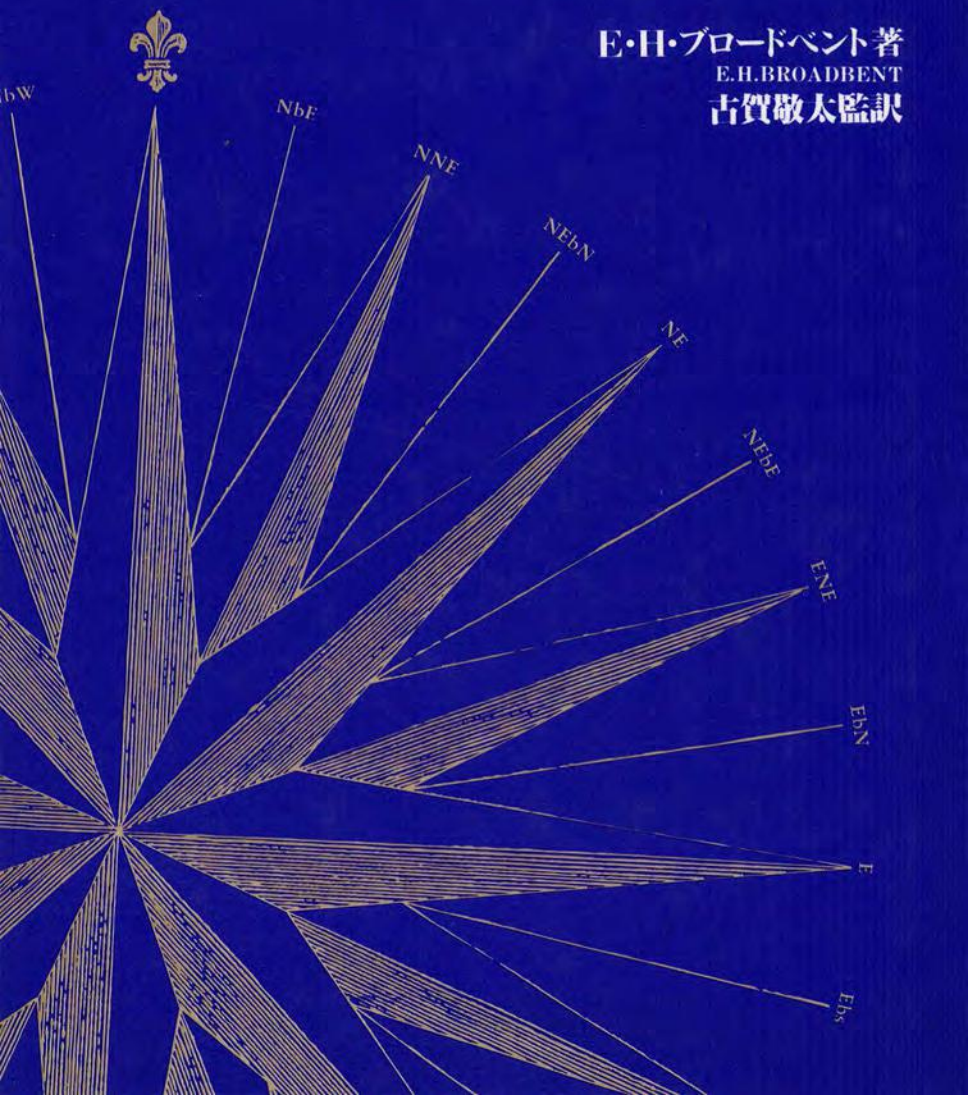
信徒の諸教会

THE PILGRIM CHURCH

初代教会からの歩み

E・H・ブロードベント著
E.H.BROADBENT
古賀敬太監訳



E. H. ブロードベント著
古　賀　敬　太　監訳

信徒の諸教会

—初代教会からの歩み—

伝道出版社

目次

第二版への序文
凡例
第一章　開始……15
第二章　キリスト教世界におけるキリスト教……43
第三章　パウロ派とボゴミール派……75
第四章　東方世界……118
第五章　ヴァルド派とアルビ派……147
第六章　中世の終焉時における教会……176
第七章　ロラード派、フス派、および兄弟団……201
第八章　宗教改革……239
第九章　再洗礼派……256

第一〇章　フランスとスイス……333
第一一章　英国の非国教徒……374
第一二章　ラバディ、敬虔派、ツィンツェンドルフ、フィラデルフィア……403
第一三章　メソジスト派と宣教運動……452
第一四章　西方……481
第一五章　ロシア……502
第一六章　グロウヴズ、ミュラー、チャップマン……545
第一七章　交わりと霊感についての諸問題……586
第一八章　結論……619
訳者あとがき……627
年表
事項索引
人名索引

第二版への序文

最も暗い悲劇を含んではいるものの、異論なく「良きニュース」、「良きおとずれ」、または「福音（ゴスペル）」と呼ばれる一つの歴史が存在する。その四人の歴史家は、「四人の福音書記者」ないし「良きニュース」の語り手として知られている。この歴史は、神が奇蹟的な誕生という形をとって、人間との関係にはいり、――そのことは、創造のみわざによっても確立されていなかった――犠牲の死と力ある復活によって死と死の原因である罪を克服し、創造者としての神の栄光に、贖い主の栄光をつけ加えたことを物語っている。

旧約聖書は、この歴史の基礎となり、それを準備するもの、またその出現を預言し、その真実性の証拠となるものを記しており、福音の歴史に先行している。そして旧約聖書はイスラエルの歴史について叙述している。したがってイスラエルの歴史は、それ自体普遍的な価値を有している。

教会史、ないし信仰によってキリストを受け入れ、キリストの弟子になった人々の集まりの歴史は、形成途上であり、いまだ完成していない。したがって、教会史は非常に重要であるものの、それは広範囲に及んでいるので、ただその一部分のみが書かれうるにすぎない。最初にひとり、次にまたひとりが、自分たちが目撃したこと、また信頼に価する記録から学んだことを語る義務がある。そしてそれらの証言は、教会史という長い旅の一行程が始まるたびごとにとり上げられ、追加される必

要がある。

本書は、教会史を理解するための一助たらんとするものである。本書では、今まで他の人々が研究し、語ったことが利用され、かつ織り込まれている。したがって本書は、今までの資料を編集し、それに著者の個人的な観点をつけ加えたものである。本書は、さまざまな書物を参照し、たびたびそれらから引用した。本書の読者諸氏は、それらの書物にも目を向け、それらの著者の忍耐深い努力と、すぐれた解釈の豊かな成果を共有するようになることが望ましい。本書の意図は、読書や研究のための十分な時間を持ちえない人々に、神の諸教会の経験を紹介することにある。それらの諸教会は、さまざまな時代や場所において存在し、教会の集い、秩序、あかしの基準として、神のことばである聖書を導き手とし、それに基づいて行動してきた教会である。それらの諸教会は、環境のいかんにかかわらず、聖書こそが自分たちの必要のすべてを満たすに十分なもの、と考えた。

常にそのような諸教会が存在した。現在、そのほとんどの教会の記録は消失している。残っているものといえば、抜粋程度の分量にすぎない。

本書においては、諸教会の叙述にとって必要であると思われる場合を除いては、一般的な歴史を書くことは省略した。また本書の主題である、聖書の教えを実践する信者の教会に関係する以外は、一般に「教会」（ecclesiastical）史という名称で理解されているものに関して説明を行なわなかった。

聖書を部分的にしか、みずからの導き手として受けとらなかった幾つかの霊的運動に関しても、本書では言及した。というのもそれらの霊的運動は、おのおのの程度に応じて、聖書に基づく行動や教会のあり方に、貴重な光を投げかけているからである。

以下に触れる諸著作に加えて、ほとんどの人々が入手しうる『ブリタニカ百科辞典』と、ヘイスティングズの『宗教と倫理の百科辞典』は、本書を執筆するに際して、非常に有益であった。

初心者は、教会史に関する標準的な参考書の中で、権威ある文献のいくつかを教えられるであろう。またそれらの文献を読む際に、もともとの出典と、それらを解説した最も信頼に価する書物（これは必ずしも有益であるとは限らない）を参照することができる。本書の中で使用し、参照した書物は、ほとんどよく知られ、入手可能なものばかりである。それらは学問的な書物というより、平易な一般受けのする書物である。したがって教会史に関心を持つ人々はだれでも、それらから十分な情報を入手することができるだろう。英語以外の言語で書かれた書物を使用する場合には、翻訳書を参照することができる。しかし翻訳書がない場合があるので、原文を読める人々のために、原文の題名を掲載しておく。

教会史の始まりの時期に関しては、『ニカイア会議以前のキリスト教叢書』が豊富な情報を提供してくれる。本書も、そこから多くのものを利用した。マルキオーンに関しては、アードルフ・フォン・ハルナック著『マルキオーン――見知らぬ神の福音――』を参照した。またローマ帝国と関

連する事項に関しては、G・F・ヤング著『一五世紀間を通じての東方と西方』を使用した。またアウグスティーヌスに関しては、ジェイムズ・ピルキントンが翻訳し、注釈をつけ、フィリップ・シャッフが編集した『ニカイアとニカイア以後のキリスト教会の教父たちの選集』が有益である。ディーン・ミルマン著『ラテン時代のキリスト教』も、いくつかの時期に触れているので有益である。またプリスキリアーヌスと彼の教えに関しては、ゲオルク・シェプスに負う所大である。彼の著書『プリスキリアーヌス――新しく発見された四世紀のラテン語の文筆家――』は、一八八六年シェプスがヴュルツブルク大学で、このスペイン人の改革者の写本を発見したことについて触れている。フリードリヒ・パーレトは、この写本を、『プリスキリアーヌス――四世紀の改革者、プリスキリアーヌスの著作に関する教会史的研究と注解』の中で検討し、それに関する説明を試みた。本書も、この有益な注解書に負う所大である。パウロ派に関する資料は、アルメニア教会の中心地エチミアジンの長補祭カラペットの手による『ビザンティーン帝国におけるパウロ派』の中に与えられている。その時代に関する有益な書物として、F・C・コニビアが翻訳し、編集した『真理のかぎ――アルメニアのパウロ派教会の手引き』がある。

コニビアはこの文書を一八九一年、エチミアジンにある聖務院の図書館で発見した。彼の注釈は、非常に興味深く、有益である。『真理のかぎ』が発見されたことによって、信徒集団の信仰と教えを例証する他の文書の発見も期待される。バルカン半島におけるボゴミール派の歴史に関して

は、主にハンガリー議会の議員であるJ・ドゥ・アスボス著『ボスニアとヘルツェゴヴィナの公用旅行』と、すぐれた旅行家で古物収集家であるA・J・エヴァンズ著『徒歩でボスニアとヘルツェゴヴィナを訪れて』を参照した。同様に、ウィリアム・ミラー著『ラテン時代の東洋に関する随筆集』も使用した。東方教会、特にネストリウス派に関する章は、ラブール著『ササン朝ペルシア帝国下のキリスト教』、J・W・エサリッジ著『シリア教会』そしてF・C・バーキット著『ローマ帝国以外における初期キリスト教』に負う所大である。セレウキア教会会議に関する説明は、主にオスカー・ブラウン著『シンハデスの本』に依拠している。さらにベスーン・ベイカー著『ネストリウスと彼の教え』は、ネストリウスに関する豊富な資料を提供しており、同じベイカー著『ダマスカスのヘラクレイデスの市場』も特に本書で引用した。

これらの書物は、ネストリウスを生き生きと描写しているので、できるならば全部通読することが望ましい。ネストリウス派の中国への普及に関しては、ハクリュート協会出版のヘンリー・ユール卿著『中国(キヤセイ)とそこへの道』が最も興味深く、本書の叙述もこの書物に依拠している。

ヴァルド派とアルビ派の時代に関しては、G・S・ファーバー著『古代のヴァルド派とアルビ派』、R・メイトランド著『古代のアルビ派とヴァルド派の教義と儀式の歴史を例証する事実と文書』を参照した。しかし最も使用した書物は、特にヴァルド派の歴史と教説に関するルードヴィヒ・ケラーの著作である。彼は、国家公文書の保管人という立場を利用して、最も重要な文書を入手

し、「異端」として知られる人々の歴史を調査した。そして彼の公刊物は、これらの誤解された人々を理解する上で貴重な貢献を果たした。ケラー著『宗教改革とそれ以前の改革の諸分派』は、情報の宝庫であり、原書を読める人はみな読むべき本である。また本書はケラー著『再洗礼派の使徒』や、その他、彼の手になる多くの書物を参照した。宗教改革の時代に関しては、J・A・フルード著『エラスムスの生涯と書簡』が生き生きと描いている。またジョン・リチャード・グリーン著『簡潔な英国民の歴史』は、興味深く、関連する特定の事件の歴史的背景を説明しているので、有益かつ信頼に価する。またジョージ・マコーレイ・トレヴェリヤン著『ウィクリフの時代における英国』と、レヒラー著『ジョン・ウィクリフと彼の英国の先駆者たち』を大いに参照した。H・B・ワークマン著『宗教改革の夜明け――フスの時代――』も有益であり、彼がもともとの出典を参照している点で貴重である。また本書は、カール・フォーゲルが古代チェコ語からドイツ語に翻訳したヘルチツキー著『信仰の網』から、かなりの引用を行なった。モラビア教会の叙述に関しては、主にモラビア出版局が発行したJ・E・ハットン著『モラビア教会史』に依拠している。さらにコメンスキーに関しては、彼の手になる『死につつある母の遺言』と『タウラーの声』を引用した。前者はドラ・ペリナが、後者はフランツ・スラメニクがボヘミア語からドイツ語に翻訳したものである。最も利用した書物の中の一つが、T・M・リンジ著『宗教改革史』である。また『バプテスマ――原始キリスト教のバプテスマ、その歴史と現代に対するその意義』は、特に再洗礼派の歴史と、